

パン一つ買えない日本

香川県 高松市立太田中学校 2年

藤村 勇斗（ふじむら ゆうと）

僕たちは小さい時から同じ制服を着て学校に行き、同じ給食を食べ、同じ行動をする。同じことをすることで安心でき、なかま意識ができる。そして皆、同じことが当たり前だと思っている。それは見方を変えると一つでも違えば、つまみ出される世界でもある。こんな世界って本当に幸せなのだろうか、そんな事を感じた去年の夏の出来事がある。

僕は、母の入院のお見舞に来ていた。その日は早くから病院に来ていて、一階の焼きたてパンを買うことを楽しみにしていた。母は首の傷口から菌が入り、左顔半分が倍以上に赤くはれあがっていた。毛穴から膿も出て目もつぶれていたが、だいぶ元気になり、僕はホッとして喜んでいて。僕が昼前に、母と一緒にエレベーターで一階のパン屋へ向かい、楽しい気持ちと、母においしいパンを食べて元気になってもらいたいという思いで、店へ入ろうとした時、

「ヤベー見ろよ、あれキモッ」「あの顔すごくない？」「やばいもの見たー」「気の毒〜」と、ヒソヒソと、やりのような視線と声が聞こえてきた。あたりを見ると、振り返って見る者、わざわざ店の前に戻ってくる者、パン屋の周りは、異様な雰囲気になった。僕はトレイを取るのをやめ、代わりに母の手を取り、すぐに店を出て、人気のない電話ボックスの陰に隠れた。とっさに、どうしてそんな行動をとったのか自分でもよく分からないが母を見せたくないのか、自分が恥ずかしかったのか、ともかくそこに立っていられなかったのは事実だった。僕は、肩でハアハアと息を切らして興奮がおさまらなかった。今まで体験したことのないような圧力を感じた。身体の暴力以外にこんな暴力があるのだと感じた。そして集団の恐ろしさも感じた。母は、僕の背中をさすりながら、「ごめんよ、ごめんよ。」と、言い続けた。つぶれた目からこぼれる涙を見て、僕は我に返った。どうして母が謝るのか、どうして僕たちがここに隠れてなければいけないのか、ただ不思議を通り越して怒りに変わっていた。母は、お金を渡すから一人で行っておいでと言った。しかし、僕は、「何も悪い事はしていない、堂々とすればいいんだ。それに、一緒に行かないと意味がないんだ。」と訴えた。このままでは、得体の知れない何かを負けてしまいそうで、逃げてしまうと一生後悔しそうな気がした。母の手をまたつかみ、店へ行った。案の定、やっぱりみんなの変わった者を見るような視線が突き刺さった。震える手でトレイをしっかりとつかみ、「母さん、どのパンが一番おいしそうかなー。」

と大声で言いながら、店の中を回った。その間、どれだけの言葉や視線の攻撃を受け続けたことか。僕は、何も感じない心をわざとつくり、それを保ち続けるしかなかった。

病室に戻り、母は隣の人に僕の行動をうれしそうに話していた。ほめてくれるのはうれしいけど、自慢できる行動でもなかったと思った。

僕は、窓の外を見ながらパンを食べた。この雲一つない青い空の下、いったいどれだけの人が自由に外に出ているんだろう。美しい物を見て美しいと感じ、甘いおいをかいで笑顔があふれ、心地よい音楽を聴いて、心はずむ。本当に全ての人ができるのだろうか。誰もが自由に楽しむ権利はあるはずなのに、僕達は自分と違う者を除外したがる弱い気持ちがある。同質の者は受け入れるが、何か変わっていると、変わり者、別物とみなし、なかまに入れたがらない。歴史的にも特に江戸時代には厳しい身分制度や差別があった。しかし、もう時代は変わったのだ。僕は、一人一人がもう少し心に一センチでもいい、異なるものを受け入れるすき間をつくってほしい。容姿、障がい、人種や宗教等、異なるものを受け入れて認める心を少し広げれば解決できることなんだ。全ての間人は同じように幸せに生きる権利がある。そして、それを奪う権利は誰にもない。みんな平等で、自由でなくてはならない。自分の認めた者だけが幸せというのは、本当の幸せじゃないんだ。異文化、異民族等異質のものを認め受け入れる広い心が一人一人にあれば、この青い空の下もっと多くの笑顔と笑い声が聞こえてくるはずだ。そんなことを考えながら食べたチョコクリームたっぷりのパンが少しにがく感じられた初夏の一日だった。